

大学生の性役割態度とライフコースとの関係

呉 湘

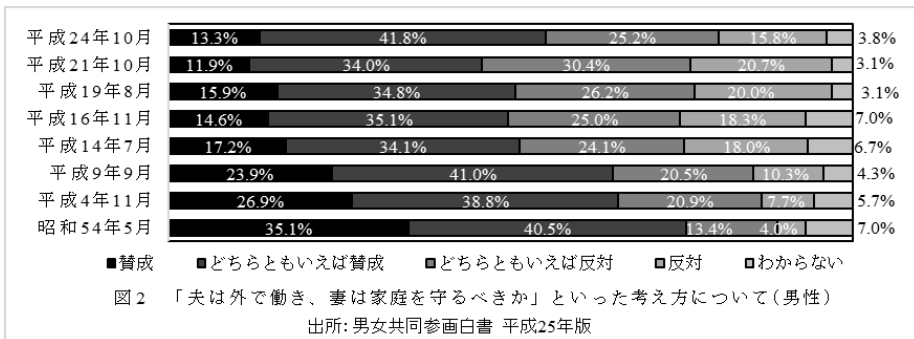
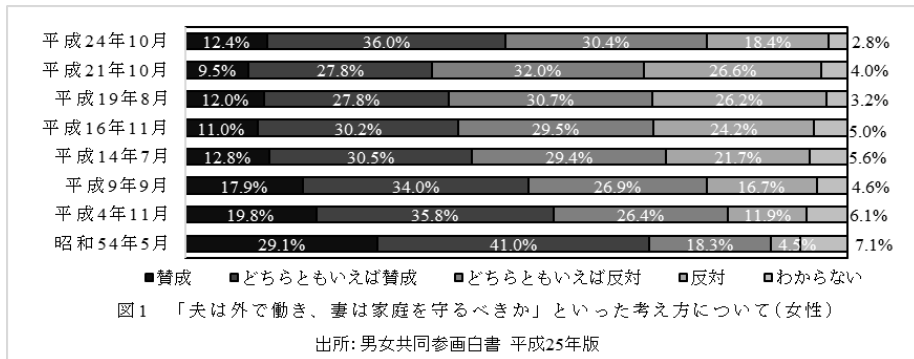
Abstract

There are many research materials focusing on the relationship between sex role attitudes and ideal life course. If the Japanese female's sex role attitude has an egalitarian direction, then Japanese females show a marked tendency toward working even after marriage or giving birth. In cases of when the Japanese male's sex role attitude has an egalitarian direction, then the Japanese male is also willing to allow their wife to continue to work even after marriage or giving birth. Based on previous research, we can presume that sex role attitudes and work values have a great effect on the choice of a female's ideal life course. This study is trying to explore this kind of effect on the direction of a female's ideal life course. Data were collected from 176 male university students and 295 female university students. They answered a questionnaire which included their ideal life course (housewives' life course, re-employment life course, remaining in work life course), the Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes (SESRA-S), work values (comfortable work environment, career aspirations, intellectual stimulation, social contribution, and family) and social considerations. Multiple logistic regression analyses demonstrated that sex role attitudes and social considerations had an influence on Japanese female ideal life courses. A Two-way Factorial ANOVA demonstrated that the respondents who chose to remain in work as a life course had the strongest egalitarian inclination.

キーワード……ライフコース 性役割態度 仕事の価値観 社会考慮

1. 問題と目的

「男女共同参画白書」(内閣府男女共同参画局,2013)では、「有配偶の女性が職業を持つかどうかを決めるに当たって、経済的な理由の他に、性別役割分担意識(「夫は外で働き、妻は家を守るべきである」という考え方)が影響を与える可能性が考えられる」と述べている。すなわち、性別役割分担意識は女性のキャリア形成に影響を与える可能性があることを指摘している。そして、「男女共同参画社会に関する世論調査」(内閣府大臣官房政府広報室,2012)では、「夫は外で働き、妻は家を守るべきである」という考え方を聞いたところ、賛成の割合(「賛成」+「どちらかといえば賛成」)が反対の割合(「反対」+「どちらかといえば反対」)を上回った。男女別にみると(図1、図2)、賛成の割合が男女ともに前回調査より増えたのは、昭和54(1979)



年の調査開始以来、初めてである（内閣府男女共同参画局,2013）。この理由について、的場（2013）は「若年層（20代と30代）の賛成割合の増加が全体割合を押し上げていると推察される」と指摘している。

これまで、性別役割分担意識（先行研究では「性役割態度」、「性役割志向」、「性別役割分業観」とも言う）などの要因を通して女性のキャリア形成（ライフコース）を検討する研究がしばしば行われてきた。特に、若年層が賛成割合を増加させているという上述の指摘に対して、大学生を対象に行った研究で、次の結果が示されている。

(1) 女子大学生の「キャリア志向」や「家族に対する配慮」は性役割志向とほとんど関連しない。性役割態度が平等志向的な女子ほど知的刺激を求めている。男子の場合では、性役割態度が平等志向的な者が「社会貢献」や「家族」を重視している。伝統的な性役割態度を持つ者ほど「キャリア志向」が強い（森永,1993）。

(2) 性別役割分業観や女性の社会進出に対して抱く態度が、自身のキャリアプランに影響する。職業志向的なキャリアプランを持つ女子大学生は、結婚相手から仕事への理解と協力が得られるかどうかを重視する（中井,2000）。

(3) 男子大学生の場合、性役割態度の平等志向性はキャリア意識にほとんど影響を与えていないが、女子大学生では性役割態度の平等志向性とキャリア意識の間には密接な関連がある。平等志向性の高い女子大学生は、仕事に関して責任が与えられ自身の能力が発揮できるという

た内容面を重視する傾向がある（杉山,2006）。

（4）女子大学生は、性役割志向の如何に拘わらず、出産・育児の期間は家庭を重視する傾向が認められる。そして、性役割態度が平等志向的な女子大学生は、伝統志向的な女子大学生より就業継続を理想としており、そのため、結婚後の生活においては、家事・育児分担制を、結婚相手としては、自分が就業することに理解・協力のある人を理想としていた。最後に、性役割志向と理想のライフコース、理想の結婚相手像および結婚後の暮らし方は互いに影響し合っている（佐野ら,2007）。

これらの結果から、性役割態度は女性のキャリア形成（ライフコース）を決定する要因の一つである可能性が大きいと言える。そして、キャリア志向などの仕事に関する価値観も女性のライフコースと関連があるのではないかと思われる。

本研究では、①理想のライフコースの選択状況が男子大学生と女子大学生との間で差があるのか、②理想のライフコースとして、それぞれのライフコースを選ぶ大学生の特徴は何なのか、③どの要因が影響してそのライフコースを選んだのか、④ライフコースに影響している要因間の関係の4点を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1 調査の対象・時期・方法

2014年7月に4年制大学に通う大学生472人（男子176人、女子295人、不明1人）を対象に、質問紙調査法による調査を実施した。調査を進めるに当たって、本研究の対象者は学部生に限定しているため、まず、学部生以外の21人と所属不明の1人を分析対象者から除外した。また、結婚相手に望むライフコースを男子に尋ねるにあたり、結婚の意思のあることが前提となる。そこで、「一生涯、結婚するつもりはありません」と回答した13人を分析対象者から除外した。さらに、「専業主婦ライフコース」、「再就職ライフコース」、「仕事継続ライフコース」以外の「その他」を選んだ13人（男子10人、女子3人）と無回答の3人も分析対象者から除外した。以上の結果、最終的な分析対象者は421人（男子181人、女子240人）となった。

2.2 調査内容

本研究では、次の4つの内容について調査を行った。

（1）理想のライフコース

この内容は国立社会保障・人口問題研究所の「第14回出生動向基本調査」（2010）を参考に作成した。質問は「あなたにとって、理想のライフコースはどちらですか」で、女子にとっては本人の望む理想のライフコース、男子にとっては結婚相手に望む理想のライフコースについて尋ねている。選択肢は次の4つのライフコースである。①「専業主婦ライフコース」（ずっと就

職しないか、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事をまったく持たないライフコース)、②「再就職ライフコース」(結婚あるいは出産の機会に一旦退職するが、子育て後に再び仕事を持つライフコース)、③「仕事継続ライフコース」(結婚あるいは出産しても退職せず、仕事を続けるライフコース)、そして④その他である。

(2) 性役割態度

この測定には鈴木(1994)の平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)を用いた。鈴木(1994)によれば、平等主義的性役割態度スケール(以下、「性役割態度」と記す)は男女の性役割態度における平等志向性、あるいは伝統志向性のレベルを客観的に測定する評価尺度である。この尺度は全部で15項目ある。例えば「女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である」について、「1=ぜんぜんそう思わない」から「5=まったくそのとおりに思う」までの5段階評定法で調査した。

(3) 仕事の価値観

ここでは森永(1999)の「仕事に関する価値観」を参考に作成した。森永は、この尺度を①「待遇・職場の条件」(「給料がよい」等の5項目)、②「キャリア」(「単に働くというのではなく、キャリアや業績を積むこと」等の5項目)、③「知的刺激」(「研修の機会がある」等の5項目)、④「家族」(「家族と一緒に過ごせる時間が多くとれる」等の2項目)、⑤「社会貢献」(「他人の役に立つ」等の4項目)の5つのグループに分けている。今回の調査では、「家族」の2項目に5項目を追加したので、「家族」は7項目となり、「仕事の価値観」は全部で26項目になっている。「あなたが仕事を選ぶ時、次の各項目はどの程度重要ですか」という質問について、「1=重要でない」から「5=重要である」までの5段階評定法で調査した。

(4) 社会考慮

社会に対する関心の程度と仕事をする傾向には何らかの関係があると考えられるので、社会考慮という尺度を本研究に取り入れた。この尺度は斎藤(1999)の3項目に吉田ら(1999)の10項目を追加した13項目から成っている。たとえば「自分の行動がいかに社会に影響を与えているかを考えることがある」という項目である。「1=まったくあてはまらない」から「5=よくあてはまる」までの5段階評定法で調査した。

3. 結果

3.1 理想のライフコースの選択状況について

421人の大学生の理想のライフコースの選択状況については、表1のようになった。理想のライフコースと性別との間に関連があるかどうかを確認するため、「性別と理想のライフコース」についてカイ2乗検定を行った。その結果、性別と理想のライフコースの間には5%水準で有意な関連が認められた。具体的には、仕事継続ライフコースを望む女子(67.5%)は男子(54.7%)

より多いのに対して、再就職ライフコースは男子（33.7%）の方が女子（22.9%）より多く望んでいた。最後に、専業主婦ライフコースを望む男子は11.6%であり、女子は9.6%であった。

表1 理想のライフコースの選択状況

		理想のライフコース			合計	
		専業主婦	再就職	仕事継続		
性別	女性	人数	23	55	162	240
		%	9.6	22.9	67.5	100.0
	男性	人数	21	61	99	181
		%	11.6	33.7	54.7	100.0

注：① $\chi^2=7.49$, $df=2$, $p<.05$

(N=421)

②出所：筆者作成

3.2 理想のライフコース間及び男女間の差について

(1)性役割態度(表2、表3、図3参照)

理想のライフコースおよび性別の違いによって性役割態度に違いがあるかどうかを検討するため、理想のライフコースと性別を独立変数とし、性役割態度得点を従属変数とする二元配置分散分析を行なった。なお、本研究の二元配置分散分析ではすべて TypeIII の平方和を用いている。その結果、理想のライフコースと性別の交互作用は有意ではなかったが、理想のライフコースの主効果は1%水準で有意であり、性別の主効果は5%水準で有意であった。Tukey のHSD法による多重比較の結果、仕事継続ライフコースの性役割態度得点は再就職ライフコースと専業主婦ライフコースの両者より0.1%水準で有意に高かった。また、再就職ライフコースの性役割態度得点は専業主婦ライフコースより1%水準で有意に高かった。

表2 性役割態度尺度の分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F
性別	235.40	1	235.40	5.30 *
理想のライフコース	3009.54	2	1504.77	33.87 **
性別×理想のライフコース	215.52	2	107.76	2.43
誤差	18438.38	415	44.43	
全体	22882.26	420		

注：①* $p<.05$, ** $p<.01$

(N=421)

②出所：筆者作成

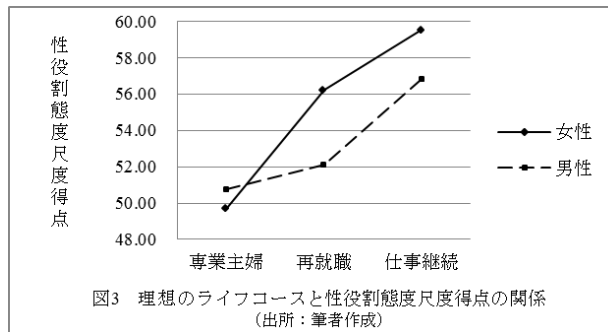
表3 理想のライフコースによる性役割態度尺度得点の違い

理想のライフコース	専業主婦	再就職	仕事継続
専業主婦		<<	<<<
再就職			<<<
仕事継続			

注：①「<<」は、左のコースよりも右上のコースの方が1%水準で有意に高いことを意味する。

同様に、「<<<」は0.1%水準で有意に高いことを意味する。

②出所：筆者作成



(2) 仕事の価値観

①待遇・職場の条件

理想のライフコースおよび性別の違いによって「待遇・職場の条件」に差があるかどうかを検討するため、理想のライフコースと性別を独立変数とし、「待遇・職場の条件」得点を従属変数とする二元配置分散分析を行なった。その結果、理想のライフコースと性別の交互作用は有意ではなかった。また、理想のライフコースの主効果と性別の主効果をみたところ、いずれも有意差はみられなかった。

②キャリア(表4、表5、図4参照)

理想のライフコースおよび性別の違いによって「キャリア」に差があるかどうかを検討するため、理想のライフコースと性別を独立変数とし、「キャリア」得点を従属変数とする二元配置分散分析を行なった。その結果、理想のライフコースと性別の交互作用は有意ではなかったが、理想のライフコースの主効果は5%水準で有意であり、性別の主効果は1%水準で有意であった。TukeyのHSD法による多重比較の結果、仕事継続ライフコースの「キャリア」得点は専業主婦ライフコースより1%水準で有意に高かった。再就職ライフコースの「キャリア」得点も専業主婦ライフコースより1%水準で有意に高かった。

表4 「キャリア」尺度の分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F
性別	84.91	1	84.91	8.63 **
理想のライフコース	78.68	2	39.34	4.00 *
性別×理想のライフコース	27.28	2	13.64	1.39
誤差	4071.92	414	9.84	
全体	4267.85	419		

注：①* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

($N=421$)

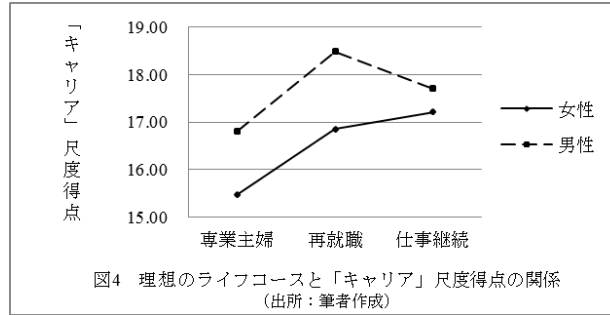
②出所：筆者作成

表5 理想のライフコースによる「キャリア」尺度得点の違い

理想のライフコース	専業主婦	再就職	仕事継続
専業主婦		<	<
再就職			n.s.
仕事継続			

注：①「<」は、左のコースよりも右上のコースの方が5%水準で有意に高いことを意味する。

②出所：筆者作成



③知的刺激(表6、表7、図5参照)

理想のライフコースおよび男女の違いによって「知的刺激」に差があるかどうかを検討するため、理想のライフコースと性別を独立変数とし、「知的刺激」得点を従属変数とする二元配置分散分析を行なった。その結果、理想のライフコースと性別の交互作用は有意ではなかったが、理想のライフコースの主効果は1%水準で有意であった。TukeyのHSD法による多重比較の結果、仕事継続ライフコースの「知的刺激」得点は専業主婦ライフコースより1%水準で有意に高かった。再就職ライフコースの「知的刺激」得点は専業主婦ライフコースより5%水準で有意に高かった。

表6 「知的刺激」尺度の分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F
性別	6.03	1	6.03	0.6
理想のライフコース	95.04	2	47.52	4.74 **
性別×理想のライフコース	9.64	2	4.82	0.48
誤差	4149.32	414	10.02	
全体	4260.06	419		

注：①** $p < 0.01$

($N=421$)

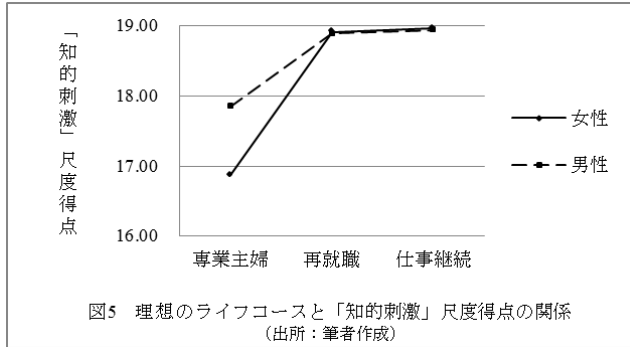
②出所：筆者作成

表7 理想のライフコースによる「知的刺激」尺度得点の違い

理想のライフコース	専業主婦	再就職	仕事継続
専業主婦		<	<<
再就職			n.s.
仕事継続			

注：①「<」は、左のコースよりも右上のコースの方が5%水準で有意に高いことを意味する。
同様に、「<<」は1%水準で有意に高いことを意味する。

②出所：筆者作成



④家族(表 8、図 6 参照)

理想のライフコースおよび男女の違いによって「家族」に差があるかどうかを検討するため、理想のライフコースと性別を独立変数とし、「家族」得点を従属変数とする二元配置分散分析を行なった。その結果、理想のライフコースと性別の交互作用は有意ではなかったが、性別の主効果が1%水準で有意であった。すなわち、男子よりも女子の方は「家族」得点が有意に高いと言える。

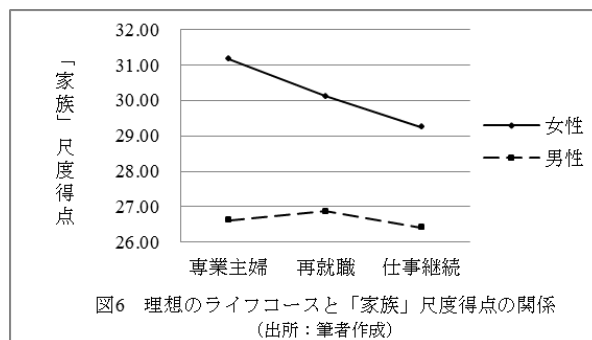
表8 「家族」尺度の分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F
性別	794.22	1	794.22	41.35 **
理想のライフコース	61.99	2	31.00	1.61
性別×理想のライフコース	28.44	2	14.22	0.74
誤差	7970.86	415	19.21	
全体	9018.42	420		

注：①** $p < .01$

(N = 421)

②出所：筆者作成



⑤社会貢献(表9、図7参照)

理想のライフコースおよび性別の違いによって「社会貢献」に差があるかどうかを検討するため、理想のライフコースと性別を独立変数とし、「社会貢献」得点を従属変数とする二元配置分散分析を行なった。その結果、理想のライフコースと性別の交互作用が5%水準で有意であった。そこで、単純主効果の検定を行った結果、理想のライフコースにおける性別の単純主効果は有意ではなかったが、男子における理想のライフコースの単純主効果($F(2,414)=3.58, p<.05$)と女子における理想のライフコースの単純主効果($F(2,414)=4.33, p<.05$)は有意であった。

Bonferroniによる多重比較の結果、男子においては、仕事継続ライフコースよりも再就職ライフコースの方が「社会貢献」得点が5%水準で有意に高く、一方女子の方は再就職ライフコースおよび仕事継続ライフコースよりも専業主婦ライフコースの方が「社会貢献」得点が5%水準で有意に低いということが言える。

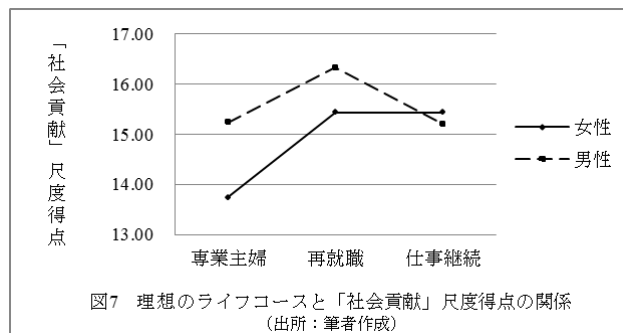
表9 「社会貢献」尺度の分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F
性別	33.04	1	33.04	4.77 *
理想のライフコース	64.68	2	32.34	4.67 *
性別×理想のライフコース	42.64	2	21.32	3.08 *
誤差	2867.60	414	6.93	
全体	2987.74	419		

注：①* $p<.05$

(N=421)

②出所：筆者作成



(3)社会考慮(表10、表11、図8参照)

理想のライフコースおよび男女の違いによって社会考慮に差があるかどうかを検討するため、理想のライフコースと性別を独立変数とし、社会考慮得点を従属変数とする二元配置分散分析を行なった。その結果、理想のライフコースと性別の交互作用は有意ではなかったが、理想のライフコースの主効果は5%水準で有意であった。TukeyのHSD法による多重比較の結果、仕事継続ライフコースの社会考慮得点は再就職ライフコースより5%水準で有意に低かった。

表10 社会考慮尺度の分散分析結果

変動因	SS	df	MS	F
性別	195.22	1	195.22	2.65
理想のライフコース	548.20	2	274.10	3.72 *
性別×理想のライフコース	378.97	2	189.48	2.57
誤差	30592.70	415	73.72	
全体	31570.67	420		

注：①* $p < .05$

(N=421)

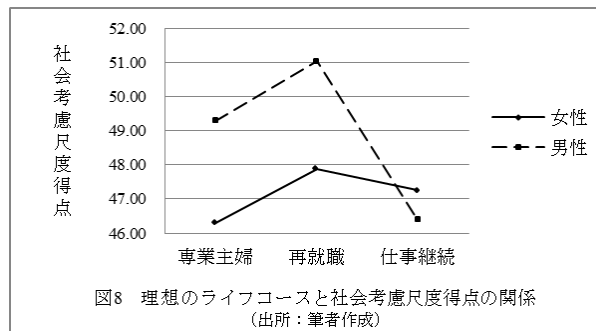
②出所：筆者作成

表11 理想のライフコースによる社会考慮尺度得点の違い

理想のライフコース	専業主婦	再就職	仕事継続
専業主婦		n.s.	n.s.
再就職			>
仕事継続			

注：①「>」は、左のコースよりも右上のコースの方が5%水準で有意に高いことを意味する。

②出所：筆者作成



3.3 理想のライフコースに影響を及ぼす要因について（表 12、表 13 参照）

性役割態度と仕事の価値観、社会考慮が理想のライフコースに影響を及ぼしているかどうかを明らかにするために、理想のライフコースを従属変数とし、性役割態度得点、仕事の価値観の下位尺度得点、および社会考慮得点を独立変数として、多項ロジスティック回帰分析を行った。

その結果を表 12 と表 13 に示す。参照カテゴリが仕事継続ライフコースの場合、専業主婦ライフコースに有意な影響を及ぼす要因は性役割態度と仕事の価値観の下位尺度「家族」、および社会考慮であった。再就職ライフコースに有意な影響を及ぼす要因は性役割態度と社会考慮であった。次に、参照カテゴリが専業主婦ライフコースの場合、再就職ライフコースに有意な影響を及ぼす要因は性役割態度、仕事の価値観の下位尺度「家族」であった。具体的には、「家族」得点が高いほど、仕事継続ライフコースや再就職ライフコースではなく専業主婦ライフコースを選ぶ傾向がある。性役割態度得点が高いほど、専業主婦ライフコースや再就職ライフコース

ではなく仕事継続ライフコースを選ぶ傾向がある。そして、社会考慮得点が高いほど、仕事継続ライフコースではなく再就職ライフコースを選ぶ傾向がある。「待遇・職場の条件」得点が高い時、専業主婦ライフコースではなく、再就職ライフコースを選ぶ傾向がある。

表12 多項ロジスティック回帰分析の結果（出所：筆者作成）

		B	SE	df
専 業 主 婦 ラ イ フ コ ー ス	性役割態度	-.172 **	.028	1
	待遇・職場の条件	-.074	.090	1
	キャリア	-.105	.083	1
	社会貢献	.008	.084	1
	知的刺激	-.115	.073	1
	家族	.109 *	.051	1
	社会考慮	.052 *	.026	1
再 就 職 ラ イ フ コ ー ス	性役割態度	-.104 **	.019	1
	待遇・職場の条件	.019	.063	1
	キャリア	-.012	.053	1
	社会貢献	.081	.059	1
	知的刺激	-.035	.050	1
	家族	.007	.032	1
	社会考慮	.039 *	.016	1

注：①* $p < .05$, ** $p < .01$, 両側検定 (N=421)

②参照カテゴリは「仕事継続ライフコース」である。

表13 多項ロジスティック回帰分析の結果（出所：筆者作成）

		B	SE	df
再 就 職 ラ イ フ コ ー ス	性役割態度	.068	.026	1
	待遇・職場の条件	.093 *	.093	1
	キャリア	.093	.087	1
	社会貢献	.074	.088	1
	知的刺激	.080	.076	1
	家族	-.102 *	.051	1
	社会考慮	-.013	.027	1

注：①* $p < .05$, 両側検定 (N=421)

②参照カテゴリは「専業主婦ライフコース」である。

つまり、理想のライフコースに影響を及ぼしている要因は性役割態度と仕事の価値観の下位尺度「家族」、および社会考慮であることが明らかになった。

3.4 3 要因の関連について（表 14 参照）

性役割態度と仕事の価値観、および社会考慮との間の関連を明らかにするために、相関係数の分析を行った。結果は以下のようになる。

(1) 女子の場合

性役割態度得点と仕事の価値観の「キャリア」、「知的刺激」、「社会貢献」の各得点との間に1%水準で有意な正の相関がみられたが、「家族」得点との間には5%水準で有意な負の相関がみられた。

そして、社会考慮得点と性役割態度得点、および仕事の価値観のすべての下位尺度得点との間に1%水準で有意な正の相関がみられた。

(2)男子の場合

性役割態度と仕事の価値観の「知的刺激」との間に1%水準で有意な正の相関がみられたが、「待遇・職場の条件」との間には5%水準で有意な負の相関がみられた。

次に、社会考慮についてみると、性役割態度との間に有意な相関はみられなかった。しかし、仕事の価値観の「家族」以外の4つの下位尺度との間に1%水準で正の相関がみられた。

表14 性役割態度、仕事の価値観、社会考慮との相関

		女性		男性	
		性役割態度	社会考慮	性役割態度	社会考慮
仕事 の 価 値 観	待遇・職場の条件	.017	.265 **	-.160 *	.223 **
	キャリア	.180 **	.344 **	.085	.382 **
	知的刺激	.224 **	.433 **	.222 **	.319 **
	社会貢献	.159 **	.397 **	.032	.379 **
	家族	-.161 *	.206 **	.078	.130
	社会考慮	.132 *		.024	

(注)①* $p < .05$, ** $p < .01$, 両側検定

($N = 421$)

②出所：筆者作成

4. 考察

4.1 理想のライフコースの選択状況

本研究では、女子大学生の理想のライフコースについて、仕事継続ライフコースを望む女子大学生の比率は男子大学生の比率より多いが、その一方で、再就職ライフコースや専業主婦ライフコースを望む男子大学生の比率は女子大学生の比率より多かったという男女間の差が存在していることが明らかになった。では、どうして男女間にはこのギャップが存在しているのか。異なる理想のライフコースを望む大学生には何か違いがあるのか。本研究は以下の通り性役割態度と仕事の価値観および社会考慮の3要因から、これらについて検討を行った。

4.2 異なる理想のライフコースを選んだ大学生の特徴

本研究では、理想のライフコース間と男女間の差を分析することを通して、異なる理想のライフコースを選んだ人の特徴を検討した。

まず、性役割態度の平等志向性は、仕事継続ライフコースが最も高く、次いで、再就職ライ

フコース、専業主婦ライフコースの順になっていることが明らかになった。男女別にみても、同じ傾向にある。すなわち、男子は平等志向的であるほど、結婚相手が仕事を継続することを理想とする傾向にある。女子は平等志向的であるほど、仕事継続を理想のライフコースとする傾向にある。

次に、本研究で分析した仕事の価値観の結果から、「キャリア」について男子は女子より得点が高いことが分かった。つまり、男子の方が女子より強いキャリア志向を持ち、就職する際に男子の方がキャリアに対する意欲が強いと考える。そして、男子も女子も、仕事継続ライフコースと再就職ライフコースを理想とする人は、専業主婦ライフコースを理想とする人より「キャリア」を重視していることが明らかになった。

「知的刺激」についてみると、森永（1993）の研究では女子は男子よりそれに高い価値をおいている結果が出たが、本研究では性差はみられなかった。図5により、仕事継続ライフコースと再就職ライフコースの女子は「知的刺激」を求める程度は男子と同じレベルになっていることがわかった。そして、理想のライフコース間の差がみられ、仕事継続ライフコースと再就職ライフコースは専業主婦ライフコースより知的刺激を重視している傾向があった。女子は仕事を継続するあるいは再就職するために知的刺激を求めていると考える。

「家族」について、男女間に違いがみられたけれども、理想のライフコース間には違いはみられなかった。言い換えれば、先行研究（森永,1993）の通り女子大学生は男子大学生よりも仕事を選ぶ時「家族」を重視していることが判明した。しかし、男女ともに仕事継続ライフコースを望む大学生は専業主婦ライフコースを望む大学生よりも、「家族」を重視する程度が低いとは言えなかった。したがって、仕事継続ライフコースを望む大学生は男女とも、「家族」を軽視するのではなく、「家族」も同時に重視し、女性の仕事と家族の両立を求めていることが示唆された。

最後に、「社会貢献」および社会考慮について考察する。「社会貢献」は「仕事を通して社会へ貢献できる」や「他人の役に立つ」などの他人に関心が高い項目である。社会考慮のような社会に対する関心がある要因とつながっていると考える。両者の分析の結果は同じ傾向がみられた。男子の場合、再就職ライフコースは仕事継続ライフコースより「社会貢献」と社会考慮を重視する程度が高い。これは、配偶者の理想のライフコースとして再就職ライフコースを選んだ男性は、社会に対する関心度がより高く、女性の出産・子育て期間における仕事と家庭の両立の困難さを意識しているため、子育てと女性の社会進出を同時に叶える方法を選んだのではないかと考える。女子の場合、仕事継続ライフコースと再就職ライフコースは専業主婦ライフコースより「社会貢献」を重視しているので、社会に進出する意欲がより強くあらわれたと言える。再就職ライフコースの方が仕事継続ライフコースよりも社会考慮の程度が高いのは、自身の社会進出意欲と子育ての両方を考慮した結果ではないかと考える。

このように、異なる理想のライフコースを選んだ大学生の特徴が明らかになった。まず、仕

事継続ライフコースを選んだ男子は性役割態度の平等志向性が一番高く、専業主婦ライフコースを選んだ男子より「キャリア」と「知的刺激」を重視している。そして、再就職ライフコースを選んだ男子大学生の平等志向性はあまり高くないが、「キャリア」と「知的刺激」の両方を重視している。特に、再就職ライフコースを選んだ男子大学生の「社会貢献」の重視度と社会考慮の程度が一番高いことが明らかになった。それに対して、専業主婦ライフコースを選んだ男性は性役割態度の平等志向性がより低く、「キャリア」と「知的刺激」を重視している程度も低いという特徴が明確になった。

女子大学生の場合、仕事継続ライフコースを選んだ人は男子大学生と同様に、性役割態度の平等志向性が一番高く、「キャリア」と「知的刺激」および「社会貢献」を重視している特徴がある。再就職ライフコースを選んだ人は、性役割態度の平等志向性が仕事継続ライフコースを選んだ人より低いが、「キャリア」と「知的刺激」および「社会貢献」を重視していると同時に、社会考慮の程度が一番高い。最後に、専業主婦ライフコースを選んだ人は性役割態度の伝統的志向性が高く、仕事に関する「キャリア」と「知的刺激」および「社会貢献」はあまり重視していないという特徴が明らかになった。

4.3 理想のライフコースに影響を及ぼす要因

多項ロジスティック回帰分析の結果、理想のライフコースに影響を及ぼす要因は「性役割態度」と「社会考慮」であることが明らかになった。ここで社会考慮とは、斎藤（1999）によれば、「個人の生活空間を『社会』として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度」と定義され、「社会を考慮しているということは、何らかの形で『社会』を意識していること」と言える。そのような「社会」は、自己を含む複数の個人が相互に影響しあうような状況であり、そうした他者及び社会に対する関心が高く、ある種の「社会認識」をもっていると考えられると斎藤（1999）は指摘している。つまり、社会考慮を測定することによって、人の社会に対する関心の程度を測ることができると考えられる。このように、社会考慮の程度が強いほど社会進出の必要性和重要性が認識できるので、それにふさわしい行動がとれるようになると思う。今後、女子大学生の仕事継続率を高める対策を検討する際に、性役割態度の平等志向性と社会考慮の程度を高めることによって、仕事継続ライフコースを選ぶ女性を増やすことが可能になるのではないだろうか。

4.4 3 要因の関連

性役割態度と仕事の価値観、および社会考慮との関連を検討した結果、女子大学生の場合は性役割態度の平等志向性が高いほど、仕事を選ぶ際に「キャリア」、「知的刺激」および「社会貢献」を重視する傾向のあることが判明した。それに対して、性役割態度の伝統志向性が高いほど、仕事を選ぶ際、「家族」を重視する傾向のあることが明らかになった。そして、女子にお

いては社会考慮と性役割態度、および仕事の価値観のすべての下位尺度との間に有意な正の相関がみられたので、社会考慮の程度が高いほど、平等志向的な性役割態度をとると同時に仕事の価値観のすべての側面を重視するという傾向のあることが判明した。したがって、社会考慮は女子大学生の性役割態度と仕事の価値観に影響を及ぼす一つの要因と考えられる。

男子大学生の場合は性役割態度の伝統志向性が高いほど、仕事を選ぶ際に「待遇・職場の条件」を重視する傾向があったが、「キャリア」と「知的刺激」を重視する傾向がみられなかった。そのうえ、従来の研究でみられたような男子の性役割態度の平等志向性と「家族」を配慮することとの関連もみられなかった。社会考慮について、性役割態度との間に有意な相関はみられなかったが、仕事の価値観の下位尺度である「待遇・職場の条件」、「キャリア」、「知的刺激」および「社会貢献」との間には正の相関がみられた。

このように、性役割態度と仕事の価値観、社会考慮との関連が男女によって異なっていることおよび、社会考慮は男女ともに性役割態度と仕事の価値観の両方と関連していることがわかった。今後は男女の社会考慮の程度を高めることを通して、性役割態度の平等志向性と仕事の価値観を変容させることができると考える。さらに、男女によってこの3要因の関連が異なっているため、性別による異なる政策を進める必要がある。

5. まとめ

本研究では、①大学生が望んでいる女子大学生の理想のライフコースの選択状況、②各理想のライフコースを望む大学生の特徴、③理想のライフコースに影響を及ぼす要因、④性役割態度と仕事の価値観および社会考慮の3要因間の関連について検討を行った。その結果、女子大学生の理想のライフコースの選択状況について男女間には違いがあることが明らかになった。そして、各理想のライフコースを期待する大学生の特徴をみると、男女ともに、仕事継続ライフコースを望む大学生は性役割態度の平等志向性が強く、仕事を選ぶ時「キャリア」と「知的刺激」を重視していることが明らかになった。再就職ライフコースを望む大学生の性役割態度の平等志向性は普通程度であるが、仕事を選ぶ時「キャリア」と「知的刺激」および「社会貢献」を重視していることが判明した。専業主婦ライフコースを望む大学生の場合、性役割態度の伝統志向性が強く、仕事を選ぶ時「キャリア」、「社会貢献」、「知的刺激」および「家族」の重視度がすべて低いことが示された。

また、このギャップの存在は性役割態度と仕事の価値観および社会考慮の影響を受けていることが原因の一つであることが確認された。最後に、男女によって性役割態度と仕事の価値観および社会考慮の3要因間の関連に違いがみられた。このことは今後女子大学生の理想のライフコースを検討する際、留意すべき点であると考えられる。

<引用文献>

国立社会保障・人口問題研究所(2010)「第14回出生動向基本調査」

http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp（2014年3月28日閲覧）

的場康子(2013)「若者の性別役割意識を考える」、*LifeDesign REPORT Summer*

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/watching/wt1305.pdf>（2016年12月28日閲覧）

森永康子(1993)「男女大学の仕事に関する価値観」、『社会心理学研究』、第9巻、第2号、pp.97-104

森永康子(1999)「成人女性の職経歴と仕事に関する価値観」、『神戸女学院大学論集』、46(1)、pp.133-148

内閣府大臣官房政府広報室（2012）「男女共同参画社会に関する世論調査」

<http://survey.gov-online.go.jp/h24/h24-danjo/index.html>（2014年3月14日閲覧）

内閣府男女共同参画局（2013）「男女共同参画白書」

http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/honpen/b1_s00_03.html

（2014年3月14日閲覧）

中井美樹(2000)「若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観」、『立命館産業社会論集』、第36巻、第3号、pp.117-127

斎藤和志(1999)「社会的迷惑行為と社会を考慮すること」、『愛知淑徳大学論集』文学部篇、24、pp.67-77

佐野まゆ・高田谷久美子・近藤洋子(2007)「大学生における性役割志向によるライフコース観の比較」、『山梨大学看護学会誌』、6(1)、pp.45-52

杉山成(2006)「キャリア意識の形成と平等志向性」、『人文研究』、111、pp.27-41

鈴木淳子(1994)「平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成」、『心理学研究』、65(1)、pp.34-41

吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆(1999)「社会的迷惑に関する研究(1)」、『名古屋大学教育学部紀要』、心理学、46、pp.53-73

主指導教員（松井賢二教授）、副指導教員（高木幸子教授・杉澤武俊准教授）